

ディキンソンの「雷」(“Thunder”)の詩群について

原口, 遼

<https://doi.org/10.15017/2332602>

出版情報 : 文學研究. 86, pp.105-154, 1989-02-28. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

ディキンソンの「雷」(“Thunder”)の詩群について

原 口 遼

〔珍妙な翻訳〕 Emily Dickinson (1830-1886) の詩は日本人にとって難解なのであろうか。¹ 例えば、次の様なディキンソン詩の翻訳を読まされた読者は、はたしてどの様なイメージを頭の中に思い描くであろうか。

天井におちる爆弾は
進歩のためのもの —
それは神経をはかどらせ
憶測を榮えさす (ママ)²

無論、詩というものすべてが難解という事もないので、難解な詩というものは概して難解なものだが、と断わりを入れなくてはなるまいが、常日頃、飛躍の多い翻訳詩、あるいは翻訳詩に限らず、シュール・リアリズム風の現代詩に馴れっこになっている現今の読者にしても「それ [=爆弾] は神経をはかどらせ (傍点筆者)」と言われては、これは吟味考量された詩語ではない、何かがおかしいぞと感ずるのではないだろうか。「憶測を榮えさす (傍点筆者)」も少しおかしいな、と。

それではここに、同一詩の同一箇所についての別の翻訳があるのでそれを紹介してみよう。

天井を爆撃するのは
元気回復したもの、
甲虫は神経を

とりとめなく盛んに憶測させる。³

こちらの方の詩行を読まされた読者は、まず「甲虫」という語が出て来ているのに、おやと思うのではあるまいか。そして、甲虫たちの中で(殺虫剤やら何やらの原因で体力の弱った甲虫は別として、位の意味であろうか、と考えつつ)元気を回復したもの〔＝甲虫〕が天井を「爆撃している」(勿論、譬喩に違いない、と取った上で)姿・格好を思い浮かべる事であろう。それにしても、次の行の「甲虫は神経を/ とりとめなく盛んに憶測させる」という表現には、カフカの『変身』以上の何か重大な事が、(甲虫の側にでなく)恐らくそこに居合わせた観察者の神経叢中に起こっているような感じを受けさせられてしまっ、やはり奇異に感じさせられるのではあるまいか。それにしても何にしても「とりとめなく盛んに」などとは何たる日本語なのか、と頭を横に振らされながら。

こうなると、人は原文は実際どうなっていてどう訳するのが正しいのだ、と苛立った気分になるであろう。私なら原文を次の様に訳すのであるが、これで意味が通ったであろうか。

天井に〔甲虫がの意〕手榴弾よろしくぶちかますと
ますますもって良い徴候。
神経はどきどき
期待ではらはら。

恐らく、英語に自信のある向きは、この詩行のコンテクストと原詩の全詩行が知りたいと思われるであろうから、次に原詩と、参考までに拙訳を提示しておく事にする。

These are the Nights that Beetles love –
From Eminence remote

Drives ponderous perpendicular
His figure intimate
The terror of the Children
The merriment of men
Depositing his *Thunder*
He hoists abroad again –
A Bomb upon the Ceiling
Is an improving thing –
It keeps the nerves progressive
Conjecture flourishing –
Too dear the Summer evening
Without discreet alarm –
Supplied by Entomology
With its remaining charm –⁴

今宵も甲虫たちの好む夜。
遠くの高みから
ゆっさゆっさと直滑降、
かの甲虫のおなじみの姿は
子供たちにとっては恐怖の的
大人たちにとっては陽気な楽しみの元。
雷をぐわぁーんと一つ落っことして
そいつはも一度大旋回。
天井に手榴弾よろしくぶちかますと
ますますもって良い徴候。
神経はどきどき
期待ではらはら。

昆虫どもが引き起こす
慎まじやかな一騒動がなかったなら
夏の夜長はあまりに高価。
虫たちが去っても魅惑は漂う。

問題の箇所は、原文、訳文ともに9～12行目の部分であるが、原文を点検すると、平石訳では“*It keeps the nerves progressive*”（11行目）が「それは神経をはかどらせ」と訳され、“*Conjecture flourishing —*”（12行目）が「憶測を榮えさす」という具合に、ほとんど辞書からの訳語そのままに直訳されている、という事が判明する。実はこの箇所は、氏の論文中において引用されている詩の一部なのであるが、その引用の理由は次の様になっている。「ディッキンソンは、他の何よりも熱心に靈感を、それがどこからどうやって来るのか知らないながら求めた感受性の詩人の1人だった。従って、彼女の想像力が、突然天から打ちかかる雷の中に、それ〔「靈感」を指すであろう一筆者〕の視覚形を認めたことは、驚きにはあたらない。」⁵と。この後に、問題の詩の訳文が続くのであるが、そうなるとう当然読者は、詩行中の「天井に落ちる爆弾は/ 進歩のためのもの —」の「天井に落ちる爆弾」を「天から打ちかかる雷」の事、即ち、天井に雷が落ちた、として取るであろう。そして、それに続く「それは神経をはかどらせ / 憶測を榮えさす」とは、これは爆弾〔＝雷〕が落ちた後の、一種黙示録風の世界であるのだから、自分たちの理解がうまくゆかないのも仕方がないのかも知れない、位に受け取るかもしれない。しかしこれでは *imagists* の先駆者とも言われて、イメージにかけては鮮明を以て鳴るディッキンソン詩の理解を、大いに誤らせる事になるので困るのである。

実際の詩の世界は原文からも分かる通り、これは夏の夜、室内に偶々戸外から飛び込んで来た甲虫が、空中をあっちに飛び、こっちにぶつかりして、一座の者に暫し余興をあたえた後、飛び去って行ってしまった事、そうした夏の夜の一場の風物をディッキンソン流に捉え、多少のウィットを以て面白おかしく描

いたものである事が分かる。従ってこの詩はさほどにおどろおどろしいものでもなければ、理解不能なものでもない、むしろ比較的平明な情景描写の詩であった事が分かるのである。それを一応の訓練のある研究者たちが、あの様に訳しているという事は、ディキンソン詩はやはり英語力のそれ相応にある(?)日本人にとっても難解であって、原詩を正確に読み取り、その適切なイメージを掴む事はおそらく難しいのだろうと推察される。

そこで私は今、「雷」(“Thunder”)という語が現れる11の詩について、⁶ その原詩と訳文とを掲げ、訳出上・解釈上の若干の問題点について補足的事項を記しておく事にしたい。ディキンソン詩の理解があのようなものである以上、我々日本人がディキンソン詩に接する場合、あれこれ批評文を書きつけるより先に、詩行を正確に押さえた方が、今後の研究にとってはどれだけ生産的か知れない、と考えるからである。恐らく、ディキンソン詩に限っては、(もしそれが正確なものなら)訳文を提出するという事だけでも、有意義な一仕事になるであろう。

なお、これは平石論文によって興味を持たされた事から、こうした翻訳を試みる事になったのであるから、「雷」の詩の翻訳の順番は氏の論文における引用の順番に合わせる事が便利であろう(その順番に番号を振る事にする)。また、コンテキスト抜きで論文の一部のみを勝手に引用する事により、平石論文に不公平な扱いとなってしまうので、当論文は比較的短いという事もあり、その全文を次に掲載しておく(pp. 112~120)。それが煩しい向きには、飛ばし読みされても結構であろう。(なお論文は表記法、組み方とも原型のままである。)

「雷」のイメージとディッキンソンの詩学

ディッキンソンの詩学の感覚的な性質は、しばしば議論されてきた。最も有名な、かつ最もきびきびしたこれについての立言は、A・テイトのものである。「彼女は抽象を知覚し感覚を思考する。」¹

この小論の目的は、雷の心象があらわれるディッキンソンの詩の中に、彼女の感覚的な詩学を確認することによって、その心象の重要性を訴えることである。実際、彼女の詩はあまりにも感覚によって導かれていたので、彼女は、自分が好む何らかの適切な心象に依存することなしには、ほとんど自分の詩について語りえなかった。そしてそういう場合に、雷の心象は確実に彼女の好むものだった。例えば、それは、次のような、T・W・ヒギンソンへの彼女の告白のよく知られた一節にも潜んでいる。「私が本を読んでいてそれが私のからだぜんたいをどんな火でも暖められないくらい冷たくすると、私にはそれが詩なのだと判ります。私が頭のてっぺんを吹きとばされるようからだで感じると、私にはそれが詩なのだと判ります。こうやってしか、私にはそれは判りません。」²

「雷」は彼女の11の詩にあらわれる。³ それらのうちの1つ、詩293では、雷の音は「ものすごい」(第2行)活動をしている彼女の諸感覚の音と比喩的に同定されている。別の1つ、詩668では、雷はただ言及されるだけで、像を形づくっていない。⁴ 残りの9つの詩は彼女の詩学を多少とも直接にとり扱っている。便宜のため、ディッキンソンが詩についての考え、あるいはむしろ詩についての心象を明らかにする際の情緒の種類と深さに応じて、それらを3つの組に分けさせて欲しい。

第1組、詩276、591、824、1128そして1581では、雷は、詩的靈感、

ディキンソンの「雷」(“Thunder”)の詩群について(原口)

あるいはその仲介者と見なされている。ディキンソンは、他の何よりも熱心に靈感を、それがどこからどうやって来るのか知らないながら求めた感受性の詩人の1人だった。従って、彼女の想像力が、突然天から打ちかかる雷の中に、その視覚形を求めたことは、驚きにはあたらない。

天井におちる爆弾は
進歩のためのもの —
それは神経をはかどらせ
憶測を栄えさす (1128, 第9-12行)

詩591は、その文脈を追うのが非常に難しいのだが、今、雷の心象の助けによって解釈を受けるように思われる。

でも通りゆくものはみな
私達のほうこそが — 忙しいと思うだろう
ちょうど最小の蜂が
昇っていき — 雷をおとし —
爆弾で — 証をたてるように — (第12-16行)

1つには、この雷の心象は、詩1128とちょうど同じかたで「昆虫学に補われて」(1128, 第15行)いる。さらに、「証をたてる」(justify)という語が意味するところのものを、やがて議論される詩1247の「証明する」(prove)とむすびつけることによって、人はかなり正確に推測しうる。ディキンソンは、結局、詩人の自己同一性である靈感への彼女の絶えざる希求をおそらく述べているのだ。

当然に、彼女は、雷=靈感に、打たれることを願う。彼女がそれに打たれたとき、彼女は「その稲妻をとり換えようとはしなかった / いのちの残

りすべてとでも」(1581, 第7, 8行)。⁵そして打たれなかったときには、彼女は失望しながら書きつける。「雷はゆっくりと急いだー／稲光は黄色いくちばしを見せた／.....／でもわたしの父の家は見過ぎてー／ただ木を四つ裂きにしただけだったー」(824-2, 第10, 11, 19, 20行)。

雷=靈感に打たれることの喜びを最も明白に示しているこの組の中の詩は、詩276である。

英語は多くの語句をもつー
私は一つしかまだ聞いていないー
こおろぎの笑い声のように低く、
雷のことばのようにどなるものー
.....
あざやかな正字法で
私のそまつな眠りにおし入りー
前途を雷鳴にとどろかせー
すると私は身動きし、そして泣くー

悲しみのためでなく、私をー
歎びが押すのだー
もういちど言って、サクソン！
しっーただ私だけに！(第1-4, 9-16行)

彼女はここで、彼女の詩についての考えを、初めは何か最後のな「語句」として、それから、おそらく英語の擬人化された名前である「サクソン」と

してそれに言及することによって、生き生きとさせている。その間雷は彼女が捜しているものの正確な指標として機能している。

- 24 -

第2組の詩, 1172そして1247, もまた, 雷を靈感と結びつけているのだが, それらに対する情緒的な反応において, この組は第1組と対立している。それは, 喜びよりもむしろ, 恐怖を強調するのだ, この事の主な理由は, 詩というものへの彼女の完全な献身と関わっている。上に引用された詩1581の第7, 8行に見られるように, 彼女は自分の生命を犠牲にさえて詩というものを追求した。⁶ しかしながら, 詩のための死, という考えは, 神のための死, という通常のキリスト教の信念から明らかに逸れていた。彼女は, かくして, 靈感を得ることを怖れた。

雷はがらくたみたいに砕けちった
お墓にいるのは最高ね
ここには自然の怒りもとどかない
爆撃だって来やしない (1172, 第5-8行)

この詩では, 彼女は, 「自然の怒り」から逸れるために, 死んでいるふりをするところまで行った。

詩1247は, ここに述べられたことがらを簡潔にとり扱っている。

雷のようにおわりまで積みこんで
それからすっかり砕きちらす
そのときすべての被造物はかくれている
これが - 詩というものでしょう -

それとも愛 — この二つは同時期に来る
私たちは両方を証明するしまたしない
片方を経験したらほろびる —
なぜなら誰も神を見たら生きてはいない — (全行)⁷

— 25 —

第2組で示された恐怖と第1組での喜びとの対立は、両価的な感情を生みだす。それは、ディッキンソンの雷の心象の詩の第3の組、詩315そして1649、ばかりをではなく、彼女の多くのほかの詩をも、特徴づけている。⁸ 雷=詩は、ここでは魅惑をもってはいるが、しかしそれは「冬のそして地獄の / 魅惑」(1649, 第7, 8行)である。⁹

詩315はディッキンソンの雷の心象の頂点であり、この詩で彼女は、自分の両価性を極端にまで走らせ、それに驚くべき表現、すなわち、恍惚における死、を与えた。

彼はあなたをだんだんに絶えいらせ —
あなたのはかない本質を
靈妙なる一撃に備えさせ
ほのかな金槌が — とおくに聞こえて —
それから近づき — それからとてもゆっくりして
あなたの息はその時まっすぐとなり —
あなたの脳は — つめたく泡だち —
一つの — 絶対の — 稲妻を — 与えて
それはあなたの裸かの魂の皮をはぐ

風がその四つ足で森に至るとき
宇宙は — 静かだ — (第4-14行)

もちろん、この詩の「彼」という人物は多種多様なものでありうる。それが「サクソン」のような、擬人化された詩の靈感を意味しているということは、1つの可能性でしかない。しかし、彼が同定されえないという当の事実が、ディキンソンの自分自身の感覚への全的没入を証拠だてており、彼女の感覚においては「一つの — 絶対の — 稲妻を — 与える」ものはなんでも、

- 26 -

それがもともと何であろうと、適しく靈感と呼ばれうるのである。なぜなら彼女には、「それが詩だと判る」からだ。

C・グリフィスはこの詩が「結局のところ、差し迫った強姦の怖れよりも穏やかなものには根ざしていないように思われる」と主張している。¹⁰ 私はむしろこの詩を、「差し迫った強姦」の「怖れ」の表現としてよりもそれの至上の喜びの表現として見なしたい。だがこのような不一致は、大した問題とはならないであろう。1つには、どんな解釈も、この詩から曖昧さを追い払うことはできそうもないが、そのことが正しく私がここで論じている点なのだ。しかも、この詩で「強姦」を受けようとしているのは1人称の語り手ではなく「あなた」である。語り手ディキンソンは、正しく両価的な位置についている。

さて彼女の雷の心象の詩が非論理的な用語法に満ちていることに注意せよ。「空よりも近い」のに「最も遠い雷」(1581, 第1, 2行)、「音のない衝突」(1581, 第18行)、「ゆっくりと急いだ」(824, 第10行)雷、同時に「こおろぎの笑い声のように低く」しかも「雷のこぼのようにどなる」(276, 第3, 4行)語句、等々。これはたぶん、彼女が、自分の詩学それじたいについて語るときに最も強烈に自分自身の諸感覚に注意を集中したからである。

一つの — 絶対の — 稲妻を — 与えて

ここでは、「稲妻」という語それじたいが稲妻のように詩を打っている。

これまで検討されてきた詩の用語法は、そこで、彼女の、感覚的なものへの没入の自然の結果として固有に非文法的であるあの文体の、原型として考慮されてよいであろう。¹¹ さらに、我われはここで、最初に引用されたタイトの発言から1センチ遠くへ行くことができるように、私には思われる。統語法を破壊することによって、また語の配置法を無視することによって、彼女の詩の多くは、読者の論理的な心に、驚きとして打ちかかる。この事は、彼女が靈感を求めたことばかりでなく、彼女がいわば、読者にもそれを求め

- 27 -

るように要求していたことをも意味する。彼女の詩に対して、我々は、雷に打たれたかのように、「頭のとっぺんがふきとばされるようにからだで感じ」なければならない。そういう場合に、彼女の詩それじたいが雷であると、言うことは安全であろう。この小論で確認されたところの、雷=詩の等式は、こうして、雷の心象が直接には現れない彼女の詩においても、詩学として、潜む。

結局、ディッキンソンの雷の心象の詩が彼女の業績全体の中でどこか中央の場所を占めていることは、確実だと思われる。

注

1. Allen Tate, "New England Culture and Emily Dickinson." *The Recognition of Emily Dickinson*, ed. Caesar R. Blake and Carlton F. Wells (Ann Arbor: Univ. of Michigan Press, 1964) 所収, p. 159. (本のタイトル名に下線なし。ママ。)

2. The Letters of Emily Dickinson, ed. Thomas H. Johnson (Cambridge: Belknap of Harvard Univ. Press,

1958), II, 473-74, この一節を詩315と比較せよ。

3. S. P. Rosenbaum, A Concordance to the Poems of Emily Dickinson (Ithaca: Cornell Univ. Press, 1964) の “thunder” “thunderbolt” “thundering” “thunder's” および “thunders” の項目を見よ。なお、すべてのディキンソンの引用は、The Poems of Emily Dickinson, 3 vols., ed. Thomas H. Johnson (Cambridge: Belknap of Harvard Univ. Press, 1955) からで、詩番号と行数によって同定される。

4. しかし人はこの詩の第7行と詩276の第3, 4行を比較することができる。

5. この詩についての有益な分析は Donald E. Thackrey, Emily

- 28 -

Dickinson's Approach to Poetry (Lincoln: Univ. of Nebraska Press, 1954), pp. 39-40にある。

6. 非常に有名な、詩449を参照せよ。また、詩1581の語り手は、雷に打たれて、既に死んでいると考えることが可能である。

7. James E. Miller は、「もし雷が言語的なものとして、また神を見るのが平凡なものを貫く洞察として考えられるならば」この詩の中に我われはディキンソンの詩学を認めうる、と指摘している。“Emily Dickinson: The Thunder's Tongue,” Miller, Quest Surd and Absurd (Chicago: Univ. of Chicago Press, 1967) 所収, P. 147. Miller はディキンソンの雷の心象に十分な注意を払っているほとんど唯一の批評家である。しかしながら、私としては、ことに彼がさらに進んで「雷は人間のものでなければならず、人間共通の経験から生起しなければならない」と同頁で言うとき、彼に同意できない。ディキンソンの雷の心象は、第1に詩的靈感を表すのであるから、それは疑いなく

「言語的」であるが、しかしそれが、単に詩人ディッキンソンが操作しうる言語の象徴であると私は考えない。Miller は私には、この心象の多様なほかの側面を無視したように思われる。

8. この意味でのディッキンソンの両価性についての興味ある2つの発言は、T. H. Johnson, Emily Dickinson (Cambridge: Belknap of Harvard Univ. Press, 1955), pp. 45-51, および Eleanor Wilner, "The Poetics of Emily Dickinson," ELH, 38 (1971), 126-27.である。

9. このような詩行は我われにディッキンソンの異教徒的感覚を察知させる。彼女の異教徒的な側面についての秀でた一般化のためには、Wilner, P. 133を見よ。

10. The Long Shadow: Emily Dickinson's Tragic Poetry (Princeton: Princeton Univ. Press, 1964),

- 29 -

P. 173 (ピリオドなし, ママ)

11. David T. Porter の観察はここで注目に値する。ディッキンソンの異例な仮定法の使用を分析しつつ、彼は「文法の制約は、客観的な外見よりも本質を捉えたいという欲求に道を譲る。この(仮定法についての)工夫は、単なる感覚的知覚の経験よりもむしろ事物や出来事が喚起する感情を掴もうとする試みを表している。」と述べている。The Art of Emily Dickinson's Early Poetry (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1966), P. 139.

- 30 -

〔詩293 (①) について〕 さて、それでは各詩について順次、拙訳、原詩、解釈上の問題点の順に記して行く事にする。

〔拙訳〕 私はやっと、あの方の名前を聞くことができるようになりました。
ひどい鼓動の高まりもなく、
魂が止まってしまうような感覚も、
部屋の中に雷鳴を聞くような感覚も、感じなくて済むようになりました。

私はもう、部屋のあの箇所を、
突っ切って歩いて行けるようになりました。
あそこであの方は身を回し、私も回したのですが …… どうしてか…
そしてあの時、私たちの腱はすっかり切れてしまった位なのですが。

〔原詩〕 I got so I could take his name –
Without – Tremendous gain –
That Stop-sensation – on my Soul –
And *Thunder* – in the Room –

I got so I could walk across
That Angle in the floor,
Where he turned so, and I turned – how –
And all our Sinew tore –

〔解釈〕 ディキンソンの場合、ダッシュを（例えばピリオドやコンマ替り等に）多用した一風変わった句読法、および名詞等の大文字化等に特徴がみられるのであるが、それらについての説明および訳出上の約束事については、物の本に説明がある。⁷ しかし、私の場合、原文そのものを掲げており、それと訳文

とを比較してもらえば済むのであるから、訳出上の約束事について縷々述べる事は省略させて頂く。ただ拙訳では、原詩における文と文、行と行との間の論理の飛躍を埋めるため、必要と思える場合どちらかといえば説明的に訳している場合がある事を断る。

さて、本詩は6連26行（各4，4，4，4，4，6行）よりなっているが、問題の Thunder は第1連第4行にみえていて、この語のはたしているイメージおよび機能は、第2連までで十分分かるので、第3連以下は訳出しなかった。⁸

第1連で引掛かる箇所は、第2行の Without – Tremendous gain – であろう。これには2通りの解釈の余地があって、その1つは、Tremendous gain を Without の目的語とみなす解釈で、私はその様に解して訳文を作った。gain は日本語に訳し難い語であるが、私は、心臓の鼓動が高まる事、油汗が出る事、心理的動揺、といった事を指すものと解釈して訳出した。⁹

この箇所についての、もう1つの解釈の仕方は、文法上の掴まえ方が全く違うののだが、この Tremendous gain を少し調子を変えて（落として）読む事によって、第1連全体へ掛かる挿入句とし、Without を第3行目の That Stop-sensation へと直接繋げて読んでしまうのである。そうすると Tremendous gain は連全体へのコメントとして受け取る事ができるので、訳文は次の様になる。

私はやっと、あの方の名前を聞くことができるようになりました。

私の魂がぱたりと止まってしまうような感覚も、

部屋の中に、雷鳴を聞くような感覚も感じなくて済むようになりました。

なんたる立ち直りぶりでしょう (Tremendous gain)。

しかし、私はディキンソンは行の途中で、こうした急激に調子を落下させる様な技巧的な読み方を殆どやらない、と考え、この解釈を捨て、前掲の初めの方の訳文を作った。

第2連では That Angle in the floor が分かり難い。普通なら That Corner on

the floorとするところであろうが、Angle と in が引っ掛かる。フロアに家具か何かが置かれていたりして、少し角になる部分があったのか(これなら on でよいが)、それともフロア自体に、ある部分で傾斜がついていて、Angle を作っている箇所があったのであろうか。¹⁰ 私は一応、あの箇所、と訳出した。あの隅では(隅を横切るわけにはまいらず) across が変である。

第2連の he turned so, and I turned では、(恋人だか、誰かと私の)両者ともに、身を回した事は分かる。しかし、この二人の身のこなしは harmonious なものではなく、二人の間には異常なほどの緊張があって、二人の動作はぎこちないものを感じられる。従って、二人 (we) は、緊張の余り、その腱を切ってしまった (Sinews ではなく Sinew で、この場合、無論暗喩) という事になる。第3行目、“how” はそうした場面を回顧した際の、反芻の呟きであろう。“How could we do that?” と。

さて、当面の問題であった “Thunder” (第1連第4行) であるが、本詩の場合、彼女が、立ち去ってしまって今はそこにいない人の名前を聞いてだけで、あたかもその人がその部屋の中に現前するかの様な、のみならず雷鳴が轟くかの様な衝撃を受けたという事を指している。(勿論、この詩の speaker は極端な神経過敏の状態である。) この箇所の事について、平石氏は「詩293では雷の音は『ものすごい』(第2行)活動をしている彼女の諸感覚の音と比喩的に同定されている。」¹¹と日本語としても首を捻る様な表現で説明をしている。「雷の音」(“Thunder”)とは、前に説明した通りであり、氏は “Tremendous gain” (第2行)を「『ものすごい』活動」と翻訳もしくは解釈しているようなのだが、氏が「ものすごい活動をしている彼女の諸感覚の音」というとき、「活動」とは、一体何の事を指しているのでしょうか。また更に、氏が「彼女の諸感覚の音」という場合、はたして「(諸)感覚」が「音」をたてるのであろうか。「感覚が音をたてる」という言い方自体、日本語として受け入れ難く、従って私には理解不能なのだが、これはどういう意味であるか。そして「雷の音は諸感覚の音と比喩的に同定されている」とはどういう日本語で、またどういう意味なので

あろうか....結局のところ、氏は本詩の意味を殆んど擱んでいない、と考えた方がむしろ早い。

〔詩668 (②) について〕

〔拙訳〕 「自然」とは私たちの眼に見えるもの。

丘, 午後,

栗鼠, 日食, まるはな蜂。

いいえ, 自然とは天,

私たちの耳に聞こえるもの。

ボボリンク鳥, 海,

雷鳴, こおろぎの声です。

いいえ, 自然とは調和,

自然とは私たちが知っていながらも,

言葉で言い表す術のないもの。

自然の単純さに較べたら,

人間の知性なんて無力そのもの。

〔原詩〕 “Nature” is what we see –

The Hill – the Afternoon –

Squirrel – Eclipse – the Bumble bee –

Nay – Nature is Heaven –

Nature is what we hear –

The Bobolink – the Sea –

Thunder – the Cricket –

Nay – Nature is Harmony –

Nature is what we know –

Yet have no art to say –

So impotent Our Wisdom is
To her Simplicity.

【解釈】 これはディキンソンの自然を詠んだ詩群の中では比較的有名な詩であるが、内容的にはさほど難しくなく、訳出上の問題点も余りない。ディキンソン詩の中では、一種の「ものはづけ」(AはBである式)のカテゴリーに入れられて、名詞が羅列されるのが特徴である。ただ、それだけでは何と云っても詩にならぬので、終盤近くになって、五感の世界から言語で表現できない世界、精神的次元へと転調が行なわれるのがディキンソン詩らしいと言えよう。これについて、平石氏は「詩668では雷は言及されるだけで像を形づくっていない」と説明しているが、これは正確な言い方ではない。私たちの耳に聞こえて来る自然〔現象〕の代表例として、ボボリンク鳥の囀り、海の音、雷鳴、こおろぎの声という具合に列挙されて来れば、雷(鳴)についても、詩の読者としてはある像(イメージ)を形造っているであろう。ただ(動詞、形容詞を欠き)雷の態様について説明がなされていないので、その事を氏は「像を形づくっていない」と言っているものと解釈しておく。

【詩1128(③)について】 これについては拙訳、原詩とも、拙論の冒頭部において既に提示済み。便宜上、原詩のみ再度示しておく。

These are the Nights that Beetles love –
From Eminence remote
Drives ponderous perpendicular
His figure intimate
The terror of the Children
The merriment of men
Depositing his *Thunder*
He hoists abroad again –

A Bomb upon the Ceiling
 Is an improving thing —
 It keeps the nerves progressive
 Conjecture flourishing —
 Too dear the Summer evening
 Without discreet alarm —
 Supplied by Entomology
 With its remaining charm —

11. 2～4 はディキンソン詩においては瀕繁にみられる倒置法で、ここの部分を正置法でやや散文的に記すと His intimate figure Drives ponderously and perpendicularly From remote Eminence. となろう。1. 4 の His figure intimate は His intimate figure (甲虫のおなじみの姿) の倒置。それを figure を主語, intimate をその述語動詞と間違えて取ると (もし動詞なら intimates となる筈) 「その形は...ぼんやりと予告する」¹²等といった見当違いの訳となる。

11. 7～8 は分詞構文だから説明的に書き直すと, [After] Depositing (= Dropping) his Thunder, He [=The Beetle] hoists [=flies] abroad again. となる。ここで, “Thunder” とは甲虫が近くに寄って来たときの「轟音 (誇張法)」の事である。11. 9～10の A Bomb upon the Ceiling / Is an improving thing —とは, 天井に (upon) 甲虫が衝突すると, 小爆弾の様な音を立てるが, それは甲虫の行方を注視している大人子供たちにとっては improving (=好都合) な事, と解釈される。なぜなら「神経はどきどきするし」, 次はどっちへ飛ぶかという事で「期待 (=推測, 臆測) で胸はふくらむ」からである。

1. 15の Supplied by Entomology とは, そうした昆虫ども (Entomology=insects の意で一種の metonymy) によってもたらされるところの, という意味。

私にとって, 1. 16の With its remaining charm — の With が引っ掛かる。即ち, 通常なら, With を「～を具有している」という意味で, その直前の

Entomology に掛け、Entomology With its remaining charm — として取るであろう。しかし、それではこの its remaining charm を昆虫どもに残存するところの固有の魅力(例えば、太古より昆虫類の体内に残存する本能等)の事として、remaining を abiding ぐらいの意味に取って解釈しなければならない事になるが、それでは詩人の意味するところと違って来よう。そこで、私は with を and ぐらいの意味で取り、remaining charm を甲虫が飛び去った後でも、暫しその場に漂っている魅惑的の雰囲気という意味に解して、訳文を作った。

ディキンソン詩には、そうした語彙的、文法的に破格の表現が相当に見受けられて、それは勿論ディキンソン自身の技巧ともみられるが、一方彼女が詩を作る際、意味、イメージ、リズム、韻律等々の絡まったいくつかの問題をうまく処理しきれないまま、一応のところで小冊子(fascicle)の中に綴じ込んでしまったから、とも解されよう。

さて、平石氏は本詩の雷のイメージに関して「[靈感を希求した]彼女の想像力が、突然天から打ちかかる雷の中に、それ(=靈感であろう)の視覚形を認めたことは驚きにはあたらない」と言っている。しかし、ここでは「雷」(“Thunder”)とは甲虫が近くに飛んで来たときの羽音に過ぎないのだから、それを「天から打ちかかる雷」(即ち、天から雷が打ちかかる)として取り、かつそれを「靈感の視覚形」とする様では、氏は本詩の中で起こっている状況を掴んでいるとはいえず、こころの氏の言い方は(意味不明でもあるが)実際無意味な事になる。

話が前後するが、ここで氏が氏の論文の冒頭部で、ディキンソンの告白の事を「雷の心象」の一つの証拠例として採用している事について点検してみよう。氏は「私[ディキンソン]が頭のとっぺんを吹きとばされる様からだで感じる」という表現で、雷によって頭のとっぺんが吹きとばされる(おお、モーレッツ!)体験の様解しているようであるが、原文には次の様に記してある。

“If I feel physically as if the top of my head were *taken off* I know that is poetry (斜字体は筆者)”と。¹³ この原文でも分かる様に、それは「頭のとっぺん

を（雷などの外的衝撃によって）吹きとばされる（blown off か shattered off 位か）」といった様な violent な表現にはなっていないのである。それを「吹きとばされる」と勝手に書き直すのはどうかと思われる。¹⁴

〔詩591 (④) について〕

〔拙訳〕 太陽は許しはしない、
自分の黄光の計画を
大気が妨げるような気紛れを。
そして、たとえ雪が

悪童よろしく、微粒子の玉を
自分の眼、目がけてモロに投げつけてきても
頭こうべを避けようともしない。
堂々として我が仕事に専心し。

地を活気づけ、
海に磁気を運びさせ、
星辰を取りしきるのが太陽の仕事。
しかし、ちょっと見の者たちには、

人間どもの方こそが、ヨリ忙しいと見えるのでは。
丁度、雷や爆弾もどきの轟音蹴立てて
飛んで回るチビの小蜂のように —
我こそ忙しさの権化と、言わんばかりの。

〔原詩〕 To interrupt His Yellow Plan
The Sun does not allow

Caprices of the Atmosphere –

And even when the Snow

Heaves Balls of Specks, like Vicious Boy

Directly in His Eye –

Does not so much as turn His Head

Busy with Majesty –

'Tis His to stimulate the Earth –

And magnetize the Sea –

And bind Astronomy, in place,

Yet Any passing by

Would deem Ourselves – the busier

As the Minutest Bee

That rides – emits a *Thunder*

A Bomb – to justify –

[解釈] これは自然描写から初め終盤、例によって一捻りして寓意を持たせた詩で、比較的簡単なものなので、詳しい説明は不要であろう。ただ、本詩が justify という他動詞で終わっているが目的語がなく、justify が何を（どういう内容の事を）目的語とするのか若干不明瞭であるところが引っ掛かるかも知れない。しかし、全体のコンテクストおよび呼吸からして、私が補って訳出した様な内容になる事は推定できる。

ところが平石氏はこの“justify”について、次の様に勇ましそうに説明している。「『証しをたてる』(justify) という語が意味するところのものを、やがて議論される詩1247の『証明する』(prove) と結びつけることによって (傍点

筆者)、人はかなり正確に推測しうる。ディッキンソンは結局、詩人の自己同一性である靈感への彼女の絶えざる希求をおそらく述べているのだ¹⁵と。しかし、詩1247（後ほど検討）の中の“prove”（第6行）とは、「証明する」という意味でなく「（詩なり、美なりを）体験する、経験する」という意味であるから、それを「証明する」と訳してしまつては意味が通らず、またそう訳した上で、本詩の（たかだか蜂が忙しそうな卑小なる自己存在を正当化するといった程の意味の）“justify”と結びつけて同一内容のように解釈する事は、見当違いもはなはだしいという事になる。従つて、それに続く「ディッキンソンは、結局、詩人の自己同一性である靈感への彼女の絶えざる希求をおそらく述べているのだ」は、詩1247については、一般論として掠めるところなきにしもあらずとしても、本詩（詩591）については全くの見当違いである。

そもそも氏は、本詩について説明を加えるにあたり、「詩591は、その文脈を追うのが非常に難しいのだが、今、雷の心象の助けによって解釈を受けるように思われる」と、いかにも雷の心象への着眼が、解釈上有効である様な予告をしているのだが、¹⁶果たして「雷の心象」は助けになったであろうか。本詩〔詩591〕では、雷のイメージとは、卑小な小蜂のたてる羽音の回転音の比喻として、偶々詩中に現われた（それが Concordance の索引の“thunder”を引くことで拾い上げられた）だけなのだが。

〔詩1581 (⑤) について〕

〔拙訳〕 私が聞いた限りなく遥かな遠雷でも
天空より更に遠いということはなかった。
炎熱の昼は既にその飛び道具を納めたというのに、
今なお遠雷は鳴り止まない。
この雷に先立つ稲妻は
あろうことか他あらぬ私に落ちてきた。
でも私はこの電撃のことを

残りの人生となんか取り替えたくない。(第9行以下の訳は省略)

〔原詩〕 The farthest *Thunder* that I heard
Was nearer than the Sky
And rumbles still, though torrid Noons
Have lain their missiles by –
The Lightning that preceded it
Struck no one but myself –
But I would not exchange the Bolt
For all the rest of Life –
Indebtedness to Oxygen
The Happy may repay,
But not the obligation
To Electricity –
It founds the Homes and decks the Days
And every clamor bright
Is but the gleam concomitant
Of that waylaying Light –
The Thought is quiet as a Flake –
A Crash without a Sound,
How Life's reverberation
Its Explanation found –

〔解釈〕 本詩の事を氏は、彼女が雷=靈感に打たれる事を願った詩の例として取り上げている。「彼女は、雷=靈感に、打たれる事を願う。彼女がそれに打たれたとき、彼女は『その稲妻をとり換えようとはしなかった/いのちの残りすべてとでも』(1581, 第7, 8行)」, と。彼女が稲妻に(打たれる事を願っ

たかどつかは別として) 打たれた事を、僥倖とし有難く思っている事、それはそうした解釈で構わないであろう。しかし問題は、彼女を打ったのは、詩行が明確が上にも明確に示している様に「雷」(“Thunder”)ではなく、「雷(鳴)」に先立つ「稲妻」(“Lightning”)であったという事である(5, 6行目の“The Lightning that preceded it [=the Thunder] /Struck...”を見よ)。氏の訳文中の「その稲妻をとり換えようとしなかった」にみえる「稲妻」も“Bolt”であって“Thunder”ではない。ところが、そもそも氏は“Concordance”で“thunder”を引き出して、他ならぬ“thunder”のイメージについて論議していた筈ではなかったのか。氏が仮に雷=靈感(雷とは靈感)とし、その「雷」の中に、もし“lightning,” “bolt”をも含めるのであったら、氏は“thunder”だけではなく、そちらの方の語彙についてのイメージの検討も行なうべきだったのではないだろうか。ところが本詩における当の“Thunder”はと言えば、それは遠雷として遙か遠方において“rumble”しているのみで打ちかかる靈感のイメージとはほど遠い。ところが、氏はこの“Thunder”(原詩第1行目に見える)の方については言及もせず、訳出からもカットしている。この事一つでも氏の論文の信頼性は大きく損なわれるであろう。

〔詩824 (6) について〕

〔拙訳〕 風は草を揺さぶり始めた
脅すような調子で低く唸りながら。
風は地面に脅しを投げつけ、
空にも脅しをかけた。

葉群が木から吹き飛んで行き、
一面に散らばり始めた。
埃が手で掬うかの如く舞い上がり、
道路を吹き飛んでいく。

荷馬車は通りを急ぎ
雷が急いでゆっくりと近づいて来る。
稲妻は黄色い嘴と
黒いかぎ爪を見せた。

鳥たちは巢に戸締まりをし、
家畜は納屋へと避難した。
と、巨大な大雨の雨つぶが落ちて来るや、
あたかも、ダムを支えていた

両手がついに分かたれたかのように
大水が空一面を難破させた。
しかし私の父の家は見逃してくれて、
ただ立ち木を一本損なったのみ。

[原詩] The Wind begun to rock the Grass (begun ママ)

With threatening Tunes and low –
He threw a Menace at the Earth –
A Menace at the Sky.

The Leaves unhooked themselves from Trees –
And started all abroad
The Dust did scoop itself like Hands
And threw away the Road.

The Wagons quickened on the Streets
The Thunder hurried slow –

The Lightning showed a Yellow Beak
And then a livid Claw.

The Birds put up the Bars to Nests –
The Cattle fled to Barns –
There came one drop of Giant Rain
And then as if the Hands

The held the Dams had parted hold
The Waters Wrecked the Sky,
But overlooked my Father's House –
Just quartering a Tree – [ただし Second Version]

〔解釈〕 この詩については、解釈上やや難しい箇所が1, 2箇所ある。一つは1. 17の“parted hold”であるが、私はこれを譬喩として取り、例えばダムを（巨人か何か）両手で支えていたのだが、その両手が支え切れなくなり、遂に分かたれた、として取りたい。

もう一つの難しい箇所は、最終行の“quartering a Tree”という表現である。“quarter”とは四つに裂くという意味であるが、主語は文法的にみて、2行上の“The Waters”である。大水が木を四つ裂きというのも、少し引っ掛かるのであるが、厳密に4つ（あるいは、3つ、2つ）に切り裂くと考えず、木を大いに損った位（“smash” “shatter” ぐらいの意）に考えて訳文を作った。1. 10にみえる“The Thunder”（もしくはその結果としての落雷）で木が四つ裂きにされたというのなら、イメージとしてはすっきりするが、あくまでこの“quarter”の主語は“The Waters”なのであるから。

ところで平石氏は、この詩を詩行の第10, 11, 19, 20行の4行で要約引用し「雷はゆっくりと急いだ — / 稲光は黄色いくちばしを見せた / / で

もわたしの父の家は見過して — / ただ木を四つ裂きにしただけだった — 」と記し「[雷に] 打たれなかったときには、彼女は失望しながら書きつけ」たとしている。この要約文では勿論「雷が(傍点筆者)、父の家を見過して、木を四つ裂きにした」という意味内容を通そうとしているわけであるが「父の家を『見過して』(“overlooked”), 木を『四つ裂き』(“quarter”)にした」のは、氏の引用文からは省略されているところの“The Waters”である事は前に述べた。

一方、氏は「(雷に) 打たれなかったときには、彼女は失望しながら書きつける(傍点筆者)」と記しているが、彼女のこの時の気持は、状況的にみて、これは失望といったような気楽なものではなく、大水、大雨が父の家を避ける様にして通り過ぎて行ってくれた事への安堵の念だと判断される。

いずれにしても、本詩においては、氏が目している雷=靈感という等式は成立していない。もし、強引にこの等号を成立させようとするなら、靈感とは前の詩〔詩1581〕にもみられた如く“lightning”でもあり、それならまだしも“The Waters”でもあり、その他もろもろの事象(例えば、the song, the flower, the cricket, the sea, etc.)を指している事にもなって、そうなる、結局「詩の靈感をあたえるものは詩の靈感をあたえるものである」といった tautology になってしまうのである。氏は「雷=灵感」という事を言おうとするのであるが、原文から氏が伏せていた部分を全部取り出して点検すると、灵感(の元)は雷に限らないようであり、結局、灵感(の元) = 灵感(の元) という tautology を繰り返している形になっている。¹⁷

〔詩276 (⑦) について〕

〔拙訳〕 英語には多くの語句があるけれど、
私はたった一つしか聞いたことがない。
こおろぎの笑いさざめきのように低声で、
しかも、雷のように大音声のその語句。

潮が凧いているときの
かのカスピ海の合唱のように囁きながら、
またヨタカのように、新しい節回しで
自らを告げ知らせてくれたその語句。

私の無邪気な眠りの中に
正しい綴り字でぱっと輝いて侵入して来て、
その啓示のような見通しを雷鳴のごとく響かせたので、
私は身震いし、そして泣き出してしまった。

私に加えられた、悲しみのためでなく、
むしろ突き上げて来る嬉しさのために。
かの英語よ、もう一度繰り返してみて頂戴な！
そおーっとよ、この私だけに！

[原詩] Many a phrase has the English language –

I have heard but one –

Low as the laughter of the Cricket,

Loud, as the Thunder's Tongue –

Murmuring, like old Caspian Choirs,

When the Tide's a' lull –

Saying itself in new inflection –

Like a Whippoorwill –

Breaking in bright Orthography

On my simple sleep –

Thundering its Prospective –

Till I stir, and weep –

Not for the Sorrow, done me –

But the push of Joy –

Say it again, Saxon !

Hush – Only to me !

〔解釈〕 私（本詩の speaker）は、英語の中でただ一つの語句（a phrase）を聞いた事があるが、それはある瞬間、啓示の様に雷鳴の様に轟いたけれども、私のはっとして気づいたときには、消え去ってしまっていた。その幻妙なる語句の事をもう一度是非とも掴まえたい... というのが本詩の内容である。その神秘的な語句の事については、その捉え難さを表わそうとして、一種の撞着語法で説明されているが、それは第3行から第8行までである。そして、その語句は、私の無邪気な（simple はほぼ innocent の意）眠り（眠った様な精神状態と考えてもよい）の中に、ぱっと入り込んで来て、その綴り字(Orthography)を示し、その語句の捕捉しうる（つまり詩語として定着しうる、もしくはその秘密を掌中のものにしうる）という見込みを、雷鳴の様に轟かせたのだが...と云うのである。

1. 12のI stir は睡眠中、何かにハッとして、がばと身を起こす様なイメージをあてる。

1. 15のSaxon とは、1. 1の the English language を指し、それを擬人化し、それへ呼びかけているわけである。

本詩では Thunder (ing) は、その特別の語句が、雷鳴の如く瞬時轟きながらも、やがて消滅して行く際の、その捉え難さの比喩として使用されていると言えよう。

ところで、平石氏はこの語を「雷＝靈感に打たれる事の喜びを最も明白に示

している」例として引用している。確かに、この引用された詩語を（ぼんやりとして）読むと、「あざやかな正字法で / 私のそまつな眠りに押し入る（氏の訳文）」のはその直前にみえる「どなる雷のことば（氏の訳文）」の様な印象をあたえるし、さらに次の行には「前途を雷鳴にとどろかせ（氏の訳文）」とあるので、「雷＝靈感」に打たれる喜びを示した詩なのかな、と思わせられてしまう。

しかし、原文を点検すると、氏は第2連を全部省略しているのだが、そこでは「たった一つ〔の語句〕」は単に轟雷の様であるだけでなく、「凧いだカスピ海の合唱」の様に静かなものでもあり、「ヨタカの節回し」の様に玄妙なものでもあり、それに第1連の3行目には、「こおろぎの笑いさざめき」の様に低声でもあるとも記されているのであるから、それを雷鳴の様とのみまとめるのは一面的であるし、特に第2連を全部伏せている以上、不誠実といわれても仕方がないであろう。

なお、氏の論文中、P24, 11. 20～23は意味を取る事が困難であり、特に「雷が捜し求めているものの正確な指標として機能している（傍点筆者）」という言い方は、むしろ当たっていない。

次に、氏の訳語についてだが、氏は原詩 l. 13の my simple sleep の simple を、そまつな〔眠り〕と訳しているが、simple を、そまつな、と訳してはいけない。そまつな食物、そまつな身なり、とは言うだろうが、そもそも、そまつな眠り、という語は日本語として成立し得ない。

原詩第12行から第15行にかけての訳文「すると私は身動きし、そして泣く — / 悲しみのためでなく、私を — / 歓びが押すのだ — 」であるが、「私は身動きし」という翻訳では、私が睡眠中、体位の移動が何かの理由で、無意識のうちに身を動かしたような感じで、啓示に触れてハッと驚く感じは出ていない。

第14行目の「歓びが押すのだ — 」とは the push of Joy の直訳であるが、But の次に理由を表わす for が省略されている事に気づいていない事から来る

訳文である。だが、氏の訳文を更によく見てみると、このところは「悲しみのためでなく、私を — / 歓びが押すのだ — 」という具合に、「私を — 」と「歓びが押すのだ — 」が第13行から第14行へと行渡りをしている。これは即ち、氏は“done me — / But the push of Joy”を「私を、歓びが押す」と解釈して訳している事になり、氏はこの部分を“the push of Joy does me”（そういう英語があったとして）ぐらいの意味で捉えている事になる。しかし、“done me”は“Sorrow, (which was) done (on) me”として「私へ加えられた悲しみ」として（後へつなげるのではなく）前へ掛けて訳すべき筋合いのものである。従って、この辺の事について氏は文法および意味を殆ど擱んでいないということが判明する。この際、氏の訳文の日本語の質の事についてはコメントを差し控えたい。

〔詩1172 (⑧) について〕

〔拙訳〕 雲はこぞって背中を合わせ
 北の方角が雲行き險呑
 森は駆けて行って転倒してしまった
 稲妻は二十日鼠のように忙しそうにピカピカ

雷様がボロボロッと崩れ落ちた
 お墓の中にいるって何ていいことかしら
 ここには自然の癩癩玉も届かないし
 飛道具だって飛んで来ません

〔原詩〕 The Clouds their Backs together laid
 The North begun to push
 The Forests galloped till they fell
 The Lightning played like mice

The *Thunder* crumbled like a stuff
How good to be in Tombs
Where Nature's Temper cannot reach
Nor missile ever comes (句読点なし)

〔解釈〕 この詩には、私にとって不明のところがある。例えば1. 1は平叙文にすると、The Clouds laid their Backs together となるわけだが、この場合、2つの雲が背中を一緒に合わせる（即ち、背中合わせになる）というのか、2つ以上の雲がそうしているのか、さらには多数の雲が（背中合わせと限らず）一緒になって背中を盛り上げているのか、これだけでは判断できず不明。

本詩は、ディキンソン詩ではよくみられるのだが、前半で自然現象を描写している。即ち、雲が盛り上がり、北風が吹き出し、森がざわめき出し、稲光が閃いて、ついに雷が落ちて来た……といった自然現象（天候）の急変ぶりが順を追ってまず描かれる。しかし、自然を扱ったディキンソン詩によくみられるように、詩の終盤に至り、そうしたものに接している者の内面の次元へと転調が行なわれるのである。

全体の内容としては、天候が荒れようと、雷様が落ちて来ようと、私はお墓の中に（避難しているのもしくは世を去って）いるので安全、という趣旨で、前半は天候の素早い変化を現わすのに擬人法が用いられ、後半は若干「形而上詩」風の感覚があって面白いと思う。ただ「お墓の中にいる」というイメージが独特で、おそらくは子供の頃より孤独だった詩人の精神的境位を示しているであろう。（“Grave”はConcordanceによると60回ほど使用されている。）

さて、平石氏は第2連第1行の“The Thunder crumbled like a stuff”を「雷はがらくたみたいに砕けちった」と訳しているが、動詞“crumble”とは古壁や古いパンなどの縁がぼろぼろとなって崩れて行くときなどに使用するのであるから、きわめて硬質の感じの「砕けちる」とはイメージが随分違っているよう。また“stuff”も辞書の定義にある（無冠詞で使用される）「つまらないもの、廃

物、がらくた」という意味でなく、冠詞の a がわざわざつけられているのだから、ディキンソンは雷の事を、通常感覚での(例えば雷雲の様な)流動的で不定形なものでなく、むしろ「物質、固形物」のようにして捉え、それがぼろぼろ、と崩れるようにして壊れた、というイメージを表現しようとしているものと解し、拙訳を作った。

それにしても、平石訳の「がらくたみたいに」「砕けちる」「雷」といった語がたなぎ合わせられた詩行を読まれた読者は、一体どの様なイメージを思い描くであろうか。例えば、がらくたなら、それが、砕ける、とは言わず、崩れて落ちて来る、くずおれる、ガラガラと落ちかかる、とは言うであろう。だが、砕けちる、ではがらくたそのものが細分化され散ってしまわなくてはなるまいが、がらくたは通常、なかなか細分化はされないものである。¹⁸ また、どうしてエネルギーとパワーを持つ恐ろしい雷が「がらくたみたい」と一種 bathos 風に表現されなければならないのだろうか。恐らく、氏のこのような訳文に対しては、少しでもディキンソン詩を知っている読者は、その詩の持つ清新にして独創的イメージは殺されており、訳出上の異物が間に挟まっているという印象を抱かせられる筈である。

さらに、第2連第2行の「お墓にいるのは最高ね(傍点筆者)」であるが、恐らく雷から逃げて来て、お墓のどこかに避難しているのであろう、その女の子が「お墓にいるのは最高ね」などと宜い上機嫌なものも如何なものであろうか。¹⁹

一方、同連の最終行には「(ここには)爆撃だって来やしない」とあるが、「爆撃」とは、航空機を以ての空からの爆弾攻撃の事である。従って、ここにはこうした隠れ潜んでいる無力な者に迫るかの様な航空機による追撃・爆撃のイメージが提出されており、ここに至って平石訳への違和感は極まってしまう。²⁰ これではまるでSF版不思議の国のアリスになってしまう。だが、これは、少なくともディキンソン詩ではないので、ディキンソン詩について誤ったイメージを(特に innocent な読者に)あたえる事になって困るのである。

〔詩1247 (⑨) について〕

〔拙訳〕 雷のようにぎりぎり一杯まで積みあげて
それからドドーンと大崩壊。
そのとき、もの皆、身を潜める。
これこそ....詩なのでしょうね、

それとも愛かしら。詩と愛は相い携えてやって来る。
私たちは二つながらに感じる、二つながらに感じない。
詩か愛かいずれか一つでも体験すると、身は滅びる。
だって、誰も神を見たら生き延びることはできないのだから。

〔原詩〕 To pile like *Thunder* to its close
Then crumble grand away
While Everything created hid
This — would be Poetry —

Or Love — the two coeval come —
We both and neither prove —
Experience either and consume —
For None see God and live —

〔解釈〕 本詩も自然現象の描写より始めているが、それはこの場合、完全な譬えとして提出されているのであって、詩人の本当に言いたい事は、真中以降の、詩と愛と神という概念およびその体験の事についてである。本詩の場合、各概念の大きさに比較して行数がまことに少くまた警句的であって、その内容を的確に把握する事は困難である。他の解釈の余地もあろうが、私なりの解釈

を施すと、それはほぼ次の様になるうか。

詩(体験)と愛(の体験)とは私たちにとっても同時に起こる。私たちは人生のある時に、その両方を一緒に体験(prove)するが、それらを全く体験しない事(とき)もある。詩にしても愛にしてもその体験は深く重いものなのだが、もしその一つを体験すると(両者は連動して)他方をも経験するという事になるので、体験としてはさらに重いものになり、身も心も消耗し尽してしまう。というのも、詩体験とか愛の体験とかは、神体験(信仰)の様に根の深いものであって、神を本当に体験したら、それまでの生を生き延びる事が困難であるように、やはり、詩、愛の体験後はそれまで通りのようにして生き続けるのは難しいのだから、と。

本詩については、平石氏はただ一行でコメントを済ませている。「詩1247は、ここに述べられたことがらを簡潔にとり扱っている」と。「ここに述べられたことがら(傍点筆者)」とは実際には「私(=氏)が述べた」という意味なのであるが、それを取りまとめると「詩1247では、雷=靈感への体験は、喜びよりも恐怖を表している。それは詩のための死、という考えは、神のための死という通常のキリスト教の信念から明らかに逸(ママ)れているからである」という事である。一般論として、雷から打たれるかも知れぬという体験が恐怖を催すのは当然だろうが、本詩ではその詩行の裏に、そうしたものに打たれる事は、恐怖ではあるが詩人としての栄光でもあるという一種の選別意識を潜ませていて、詩1581(の第7、8行)と異曲同工の事を言っている。このようにして人間感情の常である ambivalence というものを考えたとき、平石氏のように、第1組の詩は喜びを、第2組の詩は恐怖を表わす(「強調する」でもよい)とするような、喜び vs. 恐怖という単純な軸での二分法が有効であるかどうか、それは大いに疑問であろう。むしろ、こうした単純で固定的な分け方は、詩そのものの味わいと理解とにおいて、極端に単純な次元・事柄へとのみ眼を向けさせる弊(もしくは歪曲)を生みはしないであろうか。

氏の後半の説明「詩のための死、という考えは、神のための死、という通常

のキリスト教の信念から明らかに逸れていた」も説明としては乱暴であろう。まずディキンソンは詩（のみ）のために死すといった考え方をしていないし、本詩では何よりも愛という語（概念）が大変に重要なものにもかかわらず、氏はその語を全く無視している。その上、彼女は詩体験（愛と同時的に起きる体験）の事を神の体験（信仰体験）と同様、深く激しいものとして受け止めているのであって、決して神の方を棄てて、詩の方のみを追求しようとしたというのではない。従って、氏の説明「詩のための死、という考えは、キリスト教の信念から逸れていたのもので、彼女は詩の靈感を得る事を怖（ママ）れた」などは、殆んど口から出まかせ式の説明という事になる。

【詩1649 (10) について】

〔拙訳〕 鉛の帽子が空一面に

きっちりと不機嫌そうに被られて
私たちは全能のお方の顔を見ることがかなわなかった、
お姿は引き込もっておられて。

寒気が大筒からのように立ち上って
私たちの昼は寒々とした井戸の中のようなようだった。
雷雨は魔力をもっている
冬と地獄とを合わせたような魔力を。

〔原詩〕 A Cap of Lead across the sky
Was tight and surly drawn
We could not find the mighty Face
The Figure was withdrawn –

A Chill came up as from a shaft

Our noon became a well
A Thunder storm combines the charms
Of Winter and of Hell.

〔解釈〕 これも自然(天候)描写であるが、前半は擬人法を後半は面白い隠喩を用いて表現しており、比喩・イメージともにディキンソン特有のものである。内容的には、空がどんよりと曇っていて太陽が隠れており、辺りに寒気が支配しているという事を言っていて、比較的単純な詩である。本詩について、平石氏は次の様にコメントしている。「第2組で示された恐怖と第1組での喜びとの対立は、両面的な感情を生み出す。それはディキンソンの雷の心像の詩の第3の組、詩315そして1649...を特徴づけている」と。こうしたカテゴリー分けの有効性については、ここまでに雷の詩は大体訳出したわけであるから、人は各自その事を確認できるであろう。今、氏の主張に従って、それらの詩を3グループに分けて(詩①、②はイメージが不明確を以て除外)、雷への喜びを表す詩(③、④、⑤、⑥、⑦)、雷への恐怖を表わす詩(⑧、⑨)、両義的な詩(⑩、⑪)として括ってみて、はたして各詩がそういう事を表わしているものかどうか、確認されたい。

さて、氏の3つのカテゴリー分けは適切であったであろうか。答えは“No!”であろう。即ち、人は検討しようとして詩を読み始めるや否や、たちまち喜び、恐怖、およびその混在という三分法が、単に単純化が過ぎるというより、むしろ無意味である事に気づかされる筈である。それは詩を比較する場合、必要となってくる、(1)詩の内容、(2)内容の取り扱われ方(eg.客観的な記述・描写なのか、感情の表出なのか、何かの寓意なのか、象徴なのか)あるいはレヴェル、(3)詩の(一部のみを取り出すのでない)totality、(4)詩がいつ頃(何年に、何歳のときに)書かれたのか等々という事への顧慮が皆無だからである。

また氏は本詩について「雷=詩は、ここでは魅惑を持っているが、しかしそれは『冬のそして地獄の/魅惑』である」とコメントしている。雷=詩(雷は

詩である、或は、詩は雷である) という場合の等号の怪しい事については、既に触れたが、ここでも「雷」とはいいい条、使用されている語は、「雷雨」(“A Thunder storm”) (傍点、斜字体は筆者) であって“Thunder”ではない。即ち、「詩は雷雨」という事になるが、それではおかしからう、という事である。

〔詩315⑩について〕

〔拙訳〕 あの人あなたの魂をまさぐる。

クライマックスを迎えんとする前に、

演奏家が鍵盤をまさぐるように。

少しずつ少しずつ、あなたの気を遠くさせてゆき、

あなたの脆い性質を、

霊妙な一撃のために備えさせます。

かすかな槌音が、遠くに聞こえ、

だんだん近づき、やがて緩やかになるので、

あなたは呼吸を整える間があります。

あなたの脳髄は、冷たく泡立って.... と、

絶体絶命の、落雷、一撃。

あなたの丸裸となった魂は、堪らず皮をひんむかれる。

風が森を組み伏せるとき、

宇宙は.....静か.....

〔原詩〕 He fumbles at your Soul

As Players at the Keys

Before they drop full Music on —

He stuns you by degrees —

Prepares your brittle Nature

For the Ethereal Blow
By fainter Hammers – further heard –
Then nearer – Then so slow
Your Breath has time to straighten –
Your Brain – to bubble Cool –
Deals – One – imperial – Thunderbolt –
That scalps your naked Soul –

When Winds take Forests in their Paws –
The Universe – is still –

〔解釈〕 この詩はある状況を抽象的比喩的に描きながら、その向こう側に具体的な行為・状況を想像させるという意味では一風変わっており面白い詩である。普通、ディキンソンはこの逆が多いからである。

本詩の主語となっている彼 (=He) は、通常、牧師、演説家、詩人等として考えられており、彼の performance が、聴衆を段々と感動・恍惚へと誘って行くその過程 (宗教、芸術体験) を表しているものと考えられている。若干の批評家によると、この詩の状況は、何か性的行為のニュアンスを暗示するとされるが、それも勿論可能である。だが、このシーンをモロに「強姦」のシーンであり、性交行為を暗示していると取る事は、ディキンソン詩の時代背景、ピューリタニックな雰囲気、精神性、詩の発想の次元等を考慮に入れたとき、それは殆ど不可能と言わなくてはならない。

さて、平石訳を見ると、詩の第9行の “Your Breath has time to straighten” は「あなたの息はその時まっすぐとなり (傍点筆者)」と訳されており、これは直訳というより、むしろ誤訳の範疇に入る。

さらに、第2連第1行の “Winds take Forests in their Paws” を氏は「風がその四つ足で森に至るとき」と訳している。即ち、“take” を「至り (行き、達し

の意)」と訳し、“in their Paws”を「その四つ足で」と直訳しているが、もし原文が“take to the Forests”なら「森へ行く、逃れる（至る）」と訳しても構わないであろうし、また“on Paws”あるいは（少しきついが）“with their Paws”なら「四つ足で〔歩く、至る〕」と訳しても構わないであろう。しかし、原文は“take（他動詞）Forests”であり“in their Paws”であるから（「森を制圧する」の意）、それを「四つ足で森に至る」と訳す様では、氏の英語力がどの程度のものであるのか、かなり正確に推測しうる根拠をあたえてしまう所と言えよう。

さて氏はGriffithの所説を紹介し、次の様に反論している。「私はむしろこの詩を、『差し迫った強姦』の『怖れ』の表現としてよりもその至上の喜びの表現してみなしたい」と。本詩についての中心の議論が、強姦の恐れなのか喜悦なのか、という事になってしまっは、白衣と小柄で有名なエミリさんも、さぞかし今頃は草葉の蔭で悶絶されておられるのではないかと案ぜられる。²¹また強姦そのものについても「その至上の喜びと見なしたい（傍点筆者）」²²などという感覚は通俗劇画のそれを思わせて、人は、その想像力の粗雑さ（というよりむしろ幼稚さ）に驚かされてしまうのではあるまいか。

〔注11について〕 さて尾注についてである。氏が他の批評家の所説を引用紹介している注が2つ（注7、注11）ある。順序は前後するが、注11で氏はPorterの説を引用翻訳している。ディキンソンの非文法（破格）の生ずる原因・由来について、ポーターの説は必ずしも平石氏の説と同一（あるいは類似している）というわけではないが、そこは大目にする事にしよう。しかし、氏が丸括弧の中で「(仮定法についての)」として説明を付け加えているところは、「(仮定法についての)」だけでなく「(複数形名詞からsが落ちるといふ)〔工夫〕」という一節をも加えなくてはならない。なぜなら、ポーターは、仮定法的動詞形の破格についてひとしきり論じた後、氏の引用文の前あたりでは“This technique (=破格の語法) is not confined to verb forms alone.”として、名詞の複数形からsが落ちる破格例についても説明しているからである。

しかし、氏の訳文はここではさほど大きな破綻を来たしていない（等と、誉

められて自慢できるものでは勿論ないが)。

〔注7について〕 注7において平石氏は Miller の著作から抄訳し反論を加えている。ここの注を表面だけ走り読みする読者は、氏が反論を加えているので、氏の意見がミラーの意見より優越しているような印象をあたえられるであろう。しかし、もう少し注意深い読者が丁寧論旨につきあってみて意味を取ろうとすると、実は氏の反論の意味がよく分からない筈である。そこで原文はどうなっているのかと当てみると、ここのところも平石氏が原文を勝手に直訳し、誤解に基づいて、勇ましそうに反論していた事が判明する。

ミラーが彼の著書の146, 147頁で主張している事は、確かにディキンソンの詩学(詩についての考えというほどの意)についてであるが、しかしそれは、ディキンソンの詩学一般について述べているのではなく、(とりあえずは)彼女の詩を構成する3要素について述べているのである。念のために、その部分を簡単に訳しておく。「彼女の考えによると、詩には3つの要素がある。否、むしろ第3の要素によって宙づりのような形にして引っ張られているところの逆説的な2要素があると言えよう。これらの3要素を最単純化して言えば、それは驚き、日常性、言葉として定義される(傍点は原著では斜字)。従って彼女の理論とは『言葉の衝撃力によって、平凡な事の中に、発見をする驚き』として図式化されよう」²³と。この3要素の事をミラーはその頁と次の頁の辺りであれこれと説明していて、平石氏の訳している箇所でもまさしくこの3要素の事について述べているわけであるから、その前後を訳しておこう。「本詩〔詩1247〕の中心となるイメージは雷であるけれども、この詩にエミリの詩学の3要素全部についての象徴的暗示を見て取るにはさほど苦労はない——もし、神を見る事が平凡なものを貫く洞察〔発見〕として、また雷がそれを言葉で表現したもの(linguistic)としてみなされるならば」²⁴と。こういう次第であるから、ここの箇所の引用においては、ミラー言うところの3要素についての考えを、まず紹介しないで、いきなりその箇所のみを直訳しても意味が通るとは思えないし、実際平石氏の訳し方ではミラーの意味しているところは全く伝

わって来ていない。また引用文のまとめ方（鍵括弧に続く部分）²⁵も、原著者の言っている事と違っているのが不当である。氏がミラーを訳しているもう一つの箇所においても、ミラーの主張している事は、この3要素について（特にその中の1要素である日常性、平凡なものについて）である。つまり、ミラーは「雷とは（人工的なものでも、天界のものでも、聖界のものでもなく）人間的なもので、平凡な普通の人間体験から生まれなければならない」（意訳）²⁶と、むしろ当たり前すぎる事を言っているに過ぎないのだが、平石氏はミラーが“If the thunder is thought of as *linguistic*（斜字体筆者）”と記している文中の“linguistic”（言葉を使つての、という程の意）を早速「言語的なもの」と難解そうに訳してしまったので、後は自分の訳語に振り回されてしまっているのである。これでは調子こそ勇しいが反論にならない。

【結論】 ところで、氏は一体氏の論文で何を言いたかったのであろうか。その論文の骨子とは何だったのだろうか。恐らくそれは次の様にまとめられよう。

- (1) デイキンスンの詩には雷の出て来る詩がある。
- (2) その場合、雷とは詩を作る上での靈感と同一と考えられる。
- (3) 雷＝靈感の体験に関し雷の詩群は3グループにまとめられる。(a)雷＝靈感への喜びを表わした詩群（③，④，⑤，⑥，⑦），(b)雷＝靈感を恐怖する詩群（⑧，⑨），(c)雷＝靈感への恐怖／喜びの両方を現すもの（⑩，⑪）。
- (4) しかし、彼女は大変に「感覺的思考」をしたので矛盾した語法、破格の文章で詩を書いた。
- (5) そうした破格の用語法を持つ詩は、読者に雷のように驚きをあたえる。従つて読者も彼女同様、雷に打たれる（ような体験を持つ）べきだ。
- (6) そうすれば、雷とは彼女の詩そのものという事になる。
- (7) 結局、雷のイメージはデイキンスンの詩群において中心部に位置するのだ、と。

恐らく(4)～(7)は、相当に楽観的で希望的言説とってよく、論文としての意味はない。結局、氏の論文の骨子は(1)～(3)にあり、雷の出て来る詩群における

雷=靈感への3つの反応の仕方の検討、検証である。しかし、それらの検討は、(1)詩の理解ではなく、むしろ誤解の上になされていた事、(2)ときには“Thunder”でなく、他の概念の事をも「雷」として括っていた事、(3)詩を一部分だけピック・アップして、自説に都合の悪い部分は、伏せたり避けたりしていた事、(4)詩の内容、性質、製作年代等の事を全く考慮に入れていなかった事等によって、信頼できないものであるという事は、既に述べた。

従って、氏のやり方とは、詩を一つ一つ実地に点検する事より生まれたものでなく、むしろ機械的な分け方(3分法)をいわばア・プリオリに設定し、それに各詩を強引に合わせ、合わないところは切り捨てたり故意に伏せたりして procrustean な処理を施したものであった。しかも、誤読、誤訳だらけであった。日本語そのものにも、表記法、表現法にも容認できかねるところが多々見受けられた。

私としては目下のところ“Thunder”の現われる詩群から、何らかの共通項なり意味なりを引き出すつもりはない。それは元々、Concordanceで機械的に引き出されたものである以上、意味付けも必ずや牽強付会なものになりそうな予感がするからである。(それでもこれまでの議論において、ディキンソン詩の孕む若干の特質と問題点が明らかにされたと思う。)今は、拙論の冒頭で述べた通り、ディキンソン詩の場合、詩の訳文と解釈の提出だけでも一仕事なのだという事が分かってもらえれば、それでよい。ディキンソン詩の書誌を編んだ Ducharc が言うように「ディキンソン詩の解釈においてはただ一行のコメントの方が、丸々一頁を費しての説明より洞察的という事が暫々起こる」²⁷とするならば、我々日本人の場合、詩を訳すという事自体が——詩の綿密な解釈を前提とする以上——無言の(また雄弁な)コメントとなるであろう。拙訳にしても一つの試訳にすぎない。

かくして、一巡りした後、私の問いかけは拙論の冒頭へと戻る。果して、我々日本人にとってディキンソン詩は難しいのであろうか。答えは「恐らく左様」。「しかし、様々の種類、程度、意味合いを以て」。²⁸

(October, 1988)

*

後記。各詩を解釈するに際し曖昧な箇所について、native speakers に当って見た。それらの方々のお名前は、Robert Campbell (M. A., Ph. D. Candidate, Harvard), Lewis Cook (M. A., Ph. D. Candidate, Cornell), Scott Pugh (Ph. D., U. of North Carolina), 及び John Reed (Ph. D., U. of New Castle) である。御協力に対して篤くお礼申し上げます。なお、解釈上の間違いがあればそれは無論私のものである。また拙論の論旨・論調と彼らは無関係である。

『『雷』のイメジャリとディッキンソンの詩学』という論文に対して、私はできるだけ客観的に応接しようと努めたのであるが、読み進むにつれ数多くの誤読、誤訳、歪曲が発見された事により拙論の論調を純客観の枠内に止めえない箇所が出て来たかと恐れる。大方の御海容を乞う。

註

1. Cf. 「エミリ・ディキンソンは難しいですね。と私たちが会えば挨拶のように言う…」
稲田勝彦『エミリ・ディキンソン：天国獲得のストラテジー』 金星堂 1985年 pp.
3~4.
2. 平石貴樹 『『雷』のイメジャリとディッキンソンの詩学』 『アメリカ文学研究評論誌：ろん』 No.15 (June, 1978) p.23. ただし、第4行目の終わりの、ピリオド代わりのダッシュは平石訳では落ちているので(ママ)。
3. 加藤菊雄 『完訳エミリ・ディキンソン詩集』 研友社 1986年 p. 372. なおこの訳詩集には残念ながら誤訳が相当に散見される。
4. Thomas Johnson (ed.), *The Complete Poems of Emily Dickinson* (London: Faber & Faber, 1975), p. 506. ただし *Thunder* (斜字) は筆者のもの。
5. 平石 上掲論文 p. 23.
6. Rosenbaum 編の *Concordance* で、“thunder” のところを引くと、11の詩が抜き出される。
Cf. 平石 上掲論文 p. 28の注3。

ディキンソンの「雷」(“Thunder”)の詩群について(原口)

7. Cf. 武田雅子 『エミリの窓から』 峰書房 1988年 pp. 250-51.
8. 詩1581も部分訳。他の9の詩については全訳。
9. 概して良質の翻訳であるが、広岡氏はこの語句を「利益」と訳しておられる。モーデカイ・マーカス 広岡實編訳『ディキンソン 詩と評釈』大阪教育図書 1985年 P. 272。
10. 実は、ここの箇所はディキンソン研究者にとって一つの謎となっている様子で、彼女の家(The Dickinson Homestead)の内部を点検した学者も何人かいる様子。Cf. Jane Eberwein, *Dickinson: Strategies of Limitation* (Amherst: U. of Massachusetts Press, 1985), p. 119.
11. 平石 上掲論文 P. 22 (以下、順次に論じる故、引用頁を省略する場合もある)。
12. 加藤 前掲書 P. 372. ただし句読点に首を捻る所あり。
13. Thomas Johnson (ed.), *The Letters of Emily Dickinson* (Cambridge: The Belknap Press of Harvard U. Press, 1958), II, 473-4.
14. そもそも靈感を得る体験と言うものは音を主とした概念である Thunder よりも、光を主とした概念である lightning か、落ちかかる雷という意味の [Thunder] bolt を検討した方がより適切ではなかっただろうか。常識的に考えても、もし Thunder の項目を Concordance で引いたら、雷鳴、遠雷、雷雨、落雷といった自然現象そのものを扱った詩か、轟音の比喩としての雷鳴が普通出て来る筈で、これが詩的靈感と結びつくケースは、むしろ稀であろうと推測されるからである。
15. 平石 上掲論文 P. 23, 11, 17-21.
16. 平石 上掲論文 P. 23, 11. 9-10. 同頁11. 16-17には「この詩の雷の心象は、詩1128とちょうど同じしかたで『昆虫学に捕らわれて』(1128, 第15行) いる」と直訳されている。こうした翻訳では“Supplied by Entomology”の意味を掴まえているとは考えられない。
17. 氏の論の結論部 (P. 28) の「彼女の詩それじたいが雷であると、言うことは安全であろう」とはつまりこうした事情を示しているわけである。
18. 「がらくた」: 使い道のなくなった雑多な道具(品物) 『明解国語辞典』三省堂

1978年 P. 215.

19. 本詩は1870年（エミリ39, 40歳のとき）の作と推定されている。本詩における speaker の年齢・性別は厳密には定められない。中年の女性とする事も可能だが、その場合でも「お墓にいるのは最高ね」はやはり受け入れがたい表現である。
20. 無論、ライト兄弟の飛行（1903年）以前の事。
21. Griffith はここで特にディキンソンの“fear of masculinity”について論じているので、かなり過激そうな事を記しているわけだが、彼は巧みな表現を用いている。即ち、まず彼は主語の“He”を「恋人」「自然」「神」などの可能性があるとしてゆるやかに解釈している。“rape”という語についても、もちろん比喩的色彩をもって使用している。別の批評家 Wolff も“rape”という言葉を使用しているが、その場合、はっきりと“rape/conversion”として、宗教的回心の激しさを表す体験の事として説明している。Cf. Cynthia Wolff, *Emily Dickinson* (Reading, Mass.: Addison-Wesley, 1988), p. 280-1.
22. なお、氏の言い方の「差し迫った強姦」「強姦を受ける」（傍点筆者）とかは日本語として成立しない。また「至上の喜び」とは“bliss”の訳語であろうが、Griffith の論文をさらに1, 2頁先に下った所には、“bliss”という語が使用されている。しかし、それは結婚についての詩（詩199）に関してであり、妻になる喜び—乙女時代の無垢への哀惜、男性の力への従属の恐怖と不安という保留を含みながらの—について使用されている。“Rape”が“Bliss”とはあまり聞くものではない。
23. James Miller, p. 146. 原文は次の如し。...there were in her view three basic elements of poetry—or rather, two paradoxical ingredients which were held in suspended tension by the third. In their simplest terms, these elements might be defined as *surprise*, the *familiar*, and *language*. And the theory might be formulated: The surprise of discovery in the familiar issues from the shock of language. (斜字は原著者のもの)
24. *Ibid.*, p. 147. 原文は次の如し。...it takes only a little ingenuity to see the symbolic suggestions of all three elements of Emily's poetics in the poem—if the Thunder is thought of as linguistic, and the view of God as insight penetrating the commonplace.
25. 平石 上掲論文 p. 29 注7の2～3行目。

26. Miller, *loc. cit.* 原文は次の如し。...this thunder cannot be the artificial rumble of the stage-prop, nor an echo of the real thing captured from the sky in a divine frenzy. The thunder must be human, and must originate from the common human experience.
27. Joseph Duchac, *The Poems of Emily Dickinson, an annotated guide to commentary published in english, 1899-1977* (Boston: G. K. Hall, 1970), p. viii.
28. 私個人としては Dickison の難しさは、短詩が多いだけにシチュエーションを掴むのが難しいのだと思っている。語彙はさほど多くないが、語の組み合わせ方が独特である。複雑で入り組んだ厚みのある詩とは言えない。むしろ、俳句と似て—などと簡単にいうと若干問題が残るが—表面の意味は取りやすいであろう。しかし、各人が思い描くイメージは人によって随分違うのかも知れないので、従ってそうしたことから、別種の難しさが付きまとして来るのであろう。しかし、そうした問題はまたの機会に考えてみたい。

*

INDEX OF FIRST LINES OF POEMS DISCUSSED

Numbers within parentheses refer to the poem numbers in *The Complete Poems of Emily Dickinson* (Faber & Faber, 1975).

- A Cap of Lead across the sky (1649), 144
He fumbles at your Soul (315), 146
I got so I could take his name - (293), 121
Many a phrase has the English language - (276), 135
“Nature” is what we see - (668), 124
The Clouds that Backs together laid (1172), 139
The fathest Thunder that I heard (1581), 130
The Wind begun to rock the Grass (824), 132
These are the Nights that Beetles love - (1128), 107, 125

To interpret his Yellow Plan (591), 128

To pile like Thunder to its close (1247), 142